［道徳倫理］

まちおこし

東京が森になる日。

五十年ごとの「御一新」で、新陳代謝を繰り返してきた「東京」。
御破算と再生を繰り返す中で、現在の東京が辿り着いたのは、
突出したリーダーに一任するのではなく、
それぞれの地域の志ある者たちが、自己実現しながら
協働でまちを盛り上げていくという、コミュニティデザインの最新手法だった。

東京のまちには五十年ごとに「御一新」がくる。そう教えてくれたのは、ちゃきちゃきの江戸っ子である研究者の先輩だった。

江戸の大火や地震は、ほぼ半世紀ごとだったし、十九世紀後半の幕末から明治維新にかけて、江戸から東京へと大きくまちは変わった。都市化した東京に一九二三年、関東大震災が来る。そして第二次世界大戦末期の空襲で広がった焼け野原は、六四年の東京オリンピックとその後の高度成長期に、林立するビルに変わっていった。その後、バブルとバブルの崩壊を経て、湾岸や郊外へと東京のまちはスプロール化すると思いきや、二十一世紀に入って本格的な少子高齢化社会を迎え、今度は都心回帰だ。また二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックは、東京のまちの新たな転換点になるに違いない。

この「五十年ごとの御一新」の原因をなした、天災や戦争の惨禍そして日本経済の大波動は、多くの悲しみと苦しみを東京の人々にもたらした。それは頭を垂れて厳粛に受け止めるべき事実だが、他方で東京のまちのそこここのコミュニティに、別の意味で劇的なダイナミズムをもたらしたのも、また事実である。

まちの基本設計をパソコンのシステムに喩えれば、東京のまちの基本操作システム（OS）は五十年に一度御一新になるのである。まちの人々とまちそのもののインターフェイスをつかさどるOSが、五十年に一度バージョンアップされる。だから、そのOSに乗っかっているさまざまなまちの機能のアプリケーション、すなわちお祭りや

保井俊之・文
text by Toshiyuki Yasui

やすい　としゆき　慶應義塾大学大学院
システムデザイン・マネジメント研究科特別招聘教授。
1962年大阪生まれ。東京大学卒業後、旧大蔵省入省。
OECD、在印日本大使館、金融庁参事官、
財務省政策金融課長・地方課長などを歴任。
2008年より慶應義塾大学大学院で教壇に立つ。
国際基督教大学博士（学術）。
九州工業大学客員教授を兼務。米国PMI認定PMP。
研究分野は、システム×デザイン思考、社会システム、
政策と社会のイノベーション、協創、地域活性化など。
著書に『「日本」の売り方: 協創力が市場を制す』
『REVICによる地域の再生と活性化』
『システム×デザイン思考で世界を変える』（共著）など。

右・保井氏の教え子が参加した赤坂のお祭りの様子。
フラットに参加できる温かな雰囲気を持つ
（2015年9月13日、慶應SDM坂倉由季子撮影）。
左ページ上・芝の家。港区役所と慶應義塾大学の
協働により、港区芝3丁目の民家の一角で始められた
地域活動。子どもからシニア層まで、
居住地域を問わず自由に立ち寄れるコミュニティとして、
有志のボランティアにより運営されている。
誰もが入りやすい、外に開かれた物理設計が
地域のつながりを生んでいる。2015年10月27日撮影。
同ページ下・芝浦アイランドのマルシェに集う
地域デザイナーの若者たち。
身体に優しい野菜をテーマにしており、コミュニティづくりの
起点となっている。2015年3月21日撮影
（2点とも筆者撮影）

ら町内会やら住民交流やらの制度や慣習という、まちの「ソフト」もほぼすべて入れ替えになる。

もちろん旧OSで人気だったアプリは新しいOSになっても存続になるのだが。しかし大事なことは、OSが入れ替えになるたびに、誰がコミュニティの参加者になるのか、「ご破算で願いましては」と再起動がくる。再起動後のコミュニティのシステムの性格は基本的には、伝統あるほかの地域でありがちな門地家柄が幅を利かせるクローズドなシステムのそれではない。その地域に住んでいるだれにも開かれたオープンなシステムとなり、地域住民は開かれたシステムに自由に参加できることになる。

しかも東京のコミュニティには、システムとして「五十年ごとのバージョンアップ」が織り込まれている。五十年ごとに外からやってくる危機に対して、システムとして生き抜こうとする機能を内在しているのだ。木造密集地の中のちょっとした空き地、下町に点在する緑豊かな神社の境内、そして路地裏の防火桶など、まちの減災機能しかり。また、隅田川の花火大会は、十八世紀の大飢饉とコレラ流行の死者の鎮魂と「危機を忘れない」という精神から始められたという。このような危機の集団記憶機能しかり。東京のコミュニティには打たれ強く、どんな危機が来ても、しなやかに復活する機能がインストールされているのだ。いま流行の言葉で言えば、東京のコミュニティはレジリエントなのである。

先日も教え子のひとりが満面の笑顔で教えてくれた。「この間、お祭りでおみこし担いでいたそばを通って、いいなあ、担ぎたいなあって思っていたら、いいよ、担いでいってよ、って、担がせてくれたんです。しかも法被まで貸していただいて。ひょっとしたらここでゼミ合宿してたからかなと思ってたら、違うんです。近所で働いているというOLさんや外国人の方にも同じように、法被貸してあげて、おみこし担がせてあげて。感激しました。東京のまちってオープンだなって」。

来る者に開いていて（オープン）、参加が平らかで（フラット）、打たれ強い（レジリエント）。これが、東京のコミュニティが社会システムとしてダイナミックであり続けられる基本デザインである。

教導から協働へ、競争から協創へ。

東京のコミュニティ・システムのOSがオープン、フラット、レジリエントであることは、この三十年の間の東京で、コミュニティへの参加をデザインする際にこの上もない長所となった。まちのOSの上には、まちづくりというアプリが乗っている。この三十年間で地域のコミュニティ・デザインの方法は三段階で進化した。東京も例外ではない。いや、むしろこの三段階パラダイムシフトを、東京は先導したと言ってよい。

第一段階は「外部有識者お説教型」。一九八〇年代から二〇〇〇年代にかけて流行した、地域資源のブランド化、地域おこしイベントや地域アピールのハコモノなどだ。外部有識者がまちの外からやってきて、「あなたのまちはこの価値に気づいていない、これができていない」と「お説教」するのでこの名がある。東京では六〇年代から郊外に林立したニュータウンの団地はコンクリートのまちで、故郷のようなつながりがないと有識者から指摘され、盆おどりや運動会など、団地の住民の方々が第二のふるさとづくりに奔走されていたのを思い出す。このまちづくりの基本性格は、教導である。

第二段階は「北極星型」。二〇〇〇年代の初めから二〇一〇年代前半まで流行した。リーダーシップによる住民ビジョン共有によるまちづくりである。コミュニティの危機感を背景に、カリスマ的なリーダーが住民の中から出現し、卓抜なアイデアでまちのデザインを進めていく。この時期に流行したのは、まちおこしワークショップや地域ソフトのデザイン、そしてまちや村の株式会社化などだ。この手法は、いかにしてわがまちを他の地域に比して魅力あるものにするか、という生き残り競争であるから、コミュニティ同士の競争を生む。だからこのまちづくりの基本性格は、競争である。

しかし「お説教」から始まる「教導のまちづくり」や、リーダーの鶴の一声で地域のみながチーム別にいっせいに北極星をめざして競争しだす、「競争のまちづくり」は、時として息苦しさを呼び、頑張り過ぎを生み、持続可能性に欠ける。

こうして出てきたのは、第三段階の「自己実現とつながり」型とでも呼ぶべき、コミュニティ・デザインの手法である。この手法は二〇一〇年代に入って、東京の各地をはじめ全国で注目すべき地方創生の実践例を、次々と誕生させている。それは地域の活性化を、自分自身の課題と、多様な価値観を持つ地域の志ある個々人の活動に委ねるやり方である。ソーシャル・イノベータと呼ばれる彼らは多様な価値観を持ち、その地域に住み、その地域をよりよき方向へ変えたいと願う問題解決のテーマをそれぞれに持っている。地域をよりよき方向へ向かわせるイノベーションを起こしたいそれぞれが達成していく自己実現と、イノベータとして「衆合の力（コレクティブ・インパクト）」を起こしたいと願うつながりの広がりが、イノベータ同士の協働を生み、地域の総体としての「まちの価値」を協創していく。

教導から協働へ、競争から協創へ。これが現在の東京のまちにおけるコミュニティ・デザインのアプリケーションである。東京のまちのOSが、オープン、フラット並びにレジリエントだからこそ、よく動作するアプリである。地縁血縁に過度に依存することなく、いわゆる「緩やかな紐帯」をベースに、出入り自由でフラットな参加が、思いもしないような「1＋1＝3」という、システムとしての創発を生んでいく。

例えば、二〇〇八年から港区芝地区で活動している、コミュニティ・デザインの場「芝の家」が、その典型例である。「芝の家」は港区役所と慶應義塾大学の協働により、港区芝三丁目の歴史ある民家の一角で始められた地域活動のデザインだ。子どもからシニア層まで、居住地域を問わず自由に誰もが立ち寄れるコミュニティとして、有志のボランティアにより運営されている。持ち寄り昼食会、音あそび実験室、とん活部（肩タタキ）、芝こうえんあそび隊など、地域内外の人たちの出会いから協働まで、多彩な地域活動が百名を超える規模で行われている。

「芝の家」の特徴は、このコミュニティにどのように関わるのかは参加者本人に任されており、「芝の家」の多彩な活動はすべて自然発生的だという点だ。すなわち、参加者の出会いから地域のイノベーションに寄せる「想い」の共有が始まり、さまざまな協働が創発するのである。その結果、地域の協働を通じてさらに地域内につながりが広がり、地域コミュニティ内にあるかも知れない「無縁社会」が消えていく効果をもたらしている。

港区では、「芝の家」をはじめとするコミュニティ・デザインの手法をさらに進化させた「ご近所イノベーション学校」が第三期生を迎え、大盛況のうちに地域イノベータを続々と輩出している。このような例は世田谷区や板橋区などでもさかんである。

東京に広がる まちづくりのビオトープ。

志ある地域の変革者が個人としての自己実現をめざし、地域のつながりを広げていくという、東京のコミュニティ・デザインの最新手法。それは、地域のエコシステムを回復するビオトープにも似ている。芽吹いた草から植生を徐々に広げ、緑を点から面にし、思い思いに育つ木々を生やし、やがて森を形成するのだ。

まちづくりのビオトープをつくるには、まずイノベータがアイデアの種をまき、そこから若芽が生えてくる試みが必要だ。例えば、芝浦アイランドや五反田では、有機栽培や自然栽培の野菜など、身体に優しい野菜や食材を中心にしたマルシェを月に一度の週末に開き、コミュニティづくりのコアにしようという試みが、この数ヵ月なされている。本件のデザイナーたちはほとんど新進気鋭のアグリビジネスや飲食業の担い手やアートディレクターたちである。

これらの地域の新住民たちは、総じて高学歴で健康意識や知的欲求に敏感だ。このようなエッジの立った地域住民の地域デザインを、デザイナーたちは「身体に優しいたべもの探し」から始まる地域コミュニティの協創の物語にしようとしている。

次に、イノベータの若芽が風になぎ倒されぬよう、木々が育つ土づくりと苗床が必要だ。養分を木々で交換し、暑さや寒さをしのぎあって成長する場づくりだ。こうした場づくりの例としては、二〇一〇年代に入り、東京の各地でさかんとなっている先導的市民大学の設立・運営が挙げられる。市民大学といっても単なる教養講座的な座学の場ではない。地域での活動を志す企業の第一線の働き手や自営業の方々が、ソーシャルイノベーションの実現に向けて、共に学び、行動する場として、始業前の朝活や土曜日に通ってくるのだ。

例えば、都心の「大丸有」と通称される大手町・丸の内・有楽町エリア全体をキャンパスにみたてた市民大学「丸の内朝大学」。二〇〇九年に開校し、活動を広げている。まちづくりのソー

丸の内朝大学。「社会と自分によいこと」の気づきと参加のために、社会人が早朝から集う。2009年春に開講し、これまでにのべ1万3000人以上が通った（2015年10月27日 筆者撮影）

シャル・クリエイティブクラス、グーグルの社員が瞑想するプログラムで有名となったマインドフルネス瞑想クラス、自分自身の未来日記を書く自分デザインクラス。ソーシャルイノベーションのための多彩な講座が開かれているが、募集するとすぐに申し込みが定員いっぱいとなる講座も多いという。

○四年に廃校となった旧池尻中学校再生事業からスタートした世田谷ものづくり学校。○六年に開校したシブヤ大学。○九年に開校した六本木アカデミーヒルズの日本元気塾と表参道を拠点にする自由大学。他にもたくさんある。これらの市民大学をつなぐキーワードは、自由で緩やかな参加とつながりの形成による、地域コミュニティの前向きな変革であろう。

このようにして広がるソーシャルイノベーションの「志縁」の縁は、自分ごととして地域の問題を考えるイノベータたちを巻き込み、森を大きくしていく。例えば、赤坂のまちおこしとして東日本大震災後にスタートした「赤坂食べないと飲まナイト」。震災後沈みがちだった赤坂のまちの若手リーダーたちが中心となり、まちの外から来る人たちと地元の料飲店の人たちが気軽にフラットに触れ合える機会を提供する、新しいまちのお祭りとして始まったものだ。今では赤坂の五十店近くのお店が協働・協創する新しいデザインのまちのお祭りに発展している。実は「食べ飲まナイト」としては、上野仲町・湯島が発祥の地で、他には神楽坂をはじめ全国五地域以上に発展しているそうだ。

二〇二〇年以降のキーワードは「森」。

協働と協創の森がコミュニティ・デザインとして広がるまち、東京。二〇二〇年以降の東京のOSは、森ではないかと考えている。

東京のそこかしこで近年スタートしている先駆的なコミュニティづくりが、森林のメタファーに満ちているのも決して偶然ではないだろう。例えば二〇〇一年に旧区役所跡地に完成した、大田区民の自主的文化活動の拠点の名前は「大田文化の森」。そして、日本のファッションとデザインのトレンドを牽引してきたまちである表参道・原宿には二二年、「おもはらの森」が出現した。これは大型商業施設の中の、空中庭園ならぬ空中「森林」である。さらに一五年に竣工した豊島区役所の新庁舎は全体が樹木のような設計で、「豊島の森」がデザイン・コンセプトだ。

また中央線の西国分寺駅近くでは、家でもなく職場でもないサード・プレイスの創造性に満ちた場づくりとして、カフェ「クルミドコーヒー」が開店して十年近くになる。「クルミドコーヒー」の店主・影山知明さんは〝感謝の通貨〟の実験である国分寺の地域通貨「ぶんじ」や、シェア住居「マージュ国分寺」など、コミュニティの創造的実験を次々と進めている。

東京の地域づくりのイノベータが、協働と協創の森をビオトープが広げるように創り出し、生命の息吹と再生の輪を創り出していく。それは決して比喩ばかりではない。例えば二〇一三年十月には、大手町に三六〇〇平方メートルの広葉樹を中心とした森が誕生している。おりしも東京オリンピック・パラリンピックが開催される二〇二〇年は、明治神宮の森が造林百周年を迎える。来る者に開いていて（オープン）、参加が平らかで（フラット）、打たれ強い（レジリエント）。東京のコミュニティのOSは、森のOSでもある。東京は次の五十年で、協働と協創が花ざかりの森になるだろう。若芽はそこかしこに見えている。あとは森の木々を育て、枝と根をつなげていく作業だ。さあ、森へ行こう。●

「赤坂　食べないと飲まナイト」の地図を広げる、主宰のホッピービバレッジの社員たち。「食」を媒介にした、まちのオープンイノベーションのための新しいお祭りだ。毎年5月と11月の年2回、2日間限定で開催される。5枚つづりのチケット（前売り券3500円、当日券4000円）を購入し、赤坂界隈に点在する40数軒の参加店から選んだ5店をハシゴするという仕組み（2015年5月19日 慶應SDM 石渡美奈撮影）

国分寺の地域通貨「ぶんじ」。感謝の言葉や感想が書き込めるようになっている。メーリングリスト登録や取扱い店舗での登録で「300ぶんじ」を手に入れることができる。市内約20の店で使用可能（2015年11月7日 筆者撮影）

大手町の森。2013年、大手町に誕生した3600平方メートルにもわたる広大な森。木々の中を歩き、のびやかな感性と癒しで次の50年の東京をデザインしていく（2015年10月27日 筆者撮影）

（本稿は無報酬での執筆で、意見にわたる部分は私見です。）

たいへんよくできました

評価　5

［道徳倫理］
まちおこし

寸評　東京はこの30年間、世代、ジェンダー、言語や国籍を超えた多くの担い手が、フラットに協働と協創を進めるソーシャルな場を多く立ち上げ、育んだ。B級グルメからまちづくりデザインまで、ソーシャルデザインの実験地として、世界から人を惹きつける磁場がたくさん活動している。東京はこれからさらにフロンティアへと挑戦し続けるだろう。

別冊太陽

どこまでも　どこまでも。

日本のこころ 234

長新太 ユーモアとナンセンスの王様

これが私の生きる道だ——

独特のユーモアでナンセンス絵本の新境地を開いた長新太。「ちへいせんのみえるところ」「キャベツくん」など代表作のほか、秘蔵写真からスケッチ帖まで、未公開の資料もふんだんに紹介！

本体2300円＋税

平凡社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6574 fax 03-3230-6588
http://www.heibonsha.co.jp/